

トモコちゃん

私は、トモコちゃんという女の子のことが好きだった。これは小学生のときの話だ。

トモコちゃんは、明るい性格で勉強もスポーツも出来るような、そういう女の子だった。ただ、私が惹かれたのはそういうところではない。トモコちゃんの顔が単純に好みのタイプだったからである。恋とは、大抵そういうものだ。

トモコちゃんとは仲良しで、学校の休み時間にはドロケイなどをして遊んで、家に帰ってから、毎日ではないが、一緒に遊ぶことが多かった。

小学二年生のバレンタインデーの日、トモコちゃんからチョコをもらった。それは、毛布のタグの部分に使われるような肌触りの良いツルツルとした生地で、降り積もったばかりの雪のように真っ白い袋だった。コカコーラの缶のような色をしたリボンをほどくと、可愛らしい小粒のチョコレートが何粒か入っていた。とてもうれしかったが、それは同時に、イヤな記憶を思い出す手助けをしてしまうことにもなった。

一年前のちょうど同じ日、アスミという肌の浅黒い女の子にチョコをもらったことがある。ヤンママの娘のような顔面で、ヤンママの娘のような茶色いソバージュの髪を生やし、ヤンママの娘のようなファッションをしている女の子だったので、おそらくヤンママの娘だったのだろう。学校でアスミからチョコをもらって家に帰ると、デイズニーキャラクターのパッケージで包装された、まったく同じチョコを母親から貰った。妙に切ない気持ちになりつつ、母親からもらったぶんのチョコを食べていると、アスミから電話が掛かってきた。

チョコレート食べてくれた？という気持ちワルイ電話だった。アスミからもらったぶんのチョコはまだ食べていなかったが、母親からもらった、まったく同じチョコを食べていたので、食べたよ、と言ったときの意味不明の罪悪感。トモコちゃんからチョコをもらった瞬間、その感覚がフラッシュバックしたのである。

当時、私の母親は、ママさんバレーのチームに入っていて、毎週火曜日の夜、家事があまりにも忙しいとき以外は学校の体育館に通っていた。正確には、ボールの代わりに真っ赤な羽根のついた饅頭のようなゴムをバレーボールの要領で打ち合うインディアカというスポーツだった。そのチームのリーダーをトモコちゃんの母親とおばあさんがやっていたこともあって、母親同士もとても仲が良かった。たまに、母親の練習に着いていくと、おばあさんたちがインディアカの練習をしているあいだに、トモコちゃんと遊ぶことが出来た。そんなときは、クラスみんなが知らない時間を一緒に過ごしているということに、妙に楽しい気分になるのだった。

小学三年生のある日。学校の朝礼が終わり、教室に戻るために下駄箱で上履きに履き替えていると、私を呼ぶ母親の声が聞こえた。

その声は、まるで大海原を断ち割ったモーゼのように、はしゃぎながら教室に戻ろうとする子供たちの喧騒を貫いて、耳が認識をする前に脳が話しかけられたような、そんな感じに聞こえてきた。

ふと、声のした方に目をやると、自転車に乗った母親が片足を地面、もう一方をペダルに引っ掛けている格好でこちらを見ていた。三年生と四年生の下駄箱は、学校にいくつかある裏門のひとつと面した場所にあり、学校の外からも中の様子が伺えるような構造になっている。靴を履き替えている周りの友達も、当然私の母親の存在に気付く。その中に、トモコちゃんもいた。

「きのう夜中の番組でやってただけけど、きょうの夕方、水元公園にウッチャンナンチャンが来るんだってよ」と母親は言った。「ウッチャン派は赤い服を着て、ナンチャン派は白い服を着て集まるんだって」

ウッチャンナンチャンやダウンタウンのコント番組が大好きだった私に、その情報をどうしても教えたかったというような様子だった。それを聞いて、私は当然行きたいと思ったが、クラスメイトが集まっているこの状況に、赤面とまではいかないまでも、ひどく恥ずかしい気持ちになった。

それだけを告げると、母親は去っていった。気付くと、ほとんどの生徒はもう教室に戻っていったらしく、まわりに残っていたのは少数の仲の良いクラスメイトだけだった。

「あたしも一緒に行きたい」

教室に戻る廊下で、トモコちゃん言った。

私たちは水元公園に行くことになった。母親と妹、トモコちゃん、そして親友のシヨウタも含めた五人だ。

一旦学校で分かれて、赤か白の服に着替えてから、私の家に集合しようということになった。私は、すぐに赤いトレーナーを着て、二人が来るのを待った。水元公園は私の家から自転車で三十分ほどの大きな公園である。二人が到着してから、すぐ公園に向かうと、ウッチャンナンチャンのイベントが始まるだいたい前に到着してしまった。アスレチックや小高い山で遊びまわっていると、つい時間を忘れてしまい、ようやくイベント会場に着いたときには、もう人でいっぱいになっていた。

このイベントは、ウッチャンとナンチャンのどちらが人気があるのかを調べるというテレビ番組の企画で、集まった人たちは、全員、赤か白のいずれかの服を着ている。

押さないで下さい、危ないですから押さないで下さい、という女性のアナウンスが何度も繰り返し聞こえるだけで、私たちのような子供の背丈では、ステージがまったく見えなかった。

ウッチャンとナンチャンの声がスピーカーから聞こえてきた頃、私とシヨウタは、他の三人と逸れてしまった。

周りはほとんどが大人だ。それは、まるで赤と白のストライプの壁が自分に迫ってきているかのようなだった。前にいた若いカップルがすぐ後ろでステージが見えず困っている私とシヨウタに気付いて、お兄さんがそれぞれを variability ばんで肩車して、ステージの方を見せてくれた。赤と白の海にやっと浮上してきたステージには、ウッチャンとナンチャン、アナウンスをしている女性立っていた。その女性が困った表情で、危ないので木の上には登らないで下さい、と幾度と無く注意をしている。

それはほんの数秒の出来事で、肩車の潜水艦は、また赤と白の海に潜っていった。

肩車から降りる瞬間、偶然目をやった木の頂上にいたのはトモコちゃんだった。トモコちゃん
は、インディアカの羽根のような真っ赤な服を着ていた。